

## 序にかえて

この冊子——鹿児島大学南方海域研究センター南方海域調査研究報告第3号——は、昭和58年2月23日に本学本部棟第3会議室で行なわれた、当研究センターの企画による「パプア・ニューギニアの生活と栄養」と題するシンポジウム記録である。シンポジウムの話題提供者は以下に記す通りである。

小石 秀夫（大阪市立大学生活科学部食物学科・教授）

大塚柳太郎（東京大学医学部保健学科・助教授）

中野 和敬（鹿児島大学南方海域研究センター・教授）

司会は寺師慎一教授（鹿児島大学南方海域研究センター）が行なった。なお、このシンポジウムの参加者は30名近くだったが、鹿児島大学以外の参加者も数名あり、熱心に討論に参加された。

このシンポジウムは、南方海域研究センターの定例研究会（ほぼ月1回開催）のうち、年1～2回の割合いで学外研究者を招き、シンポジウム形式で行なうもののひとつである。この種のシンポジウムはこれまでも数回開かれてきたが、ここに収めたのは現在の専任スタッフが実際に初めて企画したシンポジウムで、今後4人からなるスタッフが順次こうした企画をしていく方針である。以上のような事情で、まず小生がその役割を受け持ったが、どのような主題とするかについては、あまりあれこれ考える必要はなかった。というのは、当研究センターは昭和58年秋から冬にかけて文部省特定研究経費による「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の第3年次としてパプア・ニューギニアへ「かごしま丸（本学水産学部所属調査練習船）」を活用して調査隊を派遣する予定だったので、その計画と関連深いテーマを選ぶことが適当と考えたからである。しかも、当研究センター所属の教官（兼務教官を含む）が理科系、社会・文化系にかかわらず広く関心のもてる内容を目指すならば、学外招請研究者は理科系出身でパプア・ニューギニアで再三フィールド調査をなされた経験のある上記のおふた方以外にないという結論が出たのである。幸い、おふた方から快諾を得ることができたので、シンポジウム開催の運びとなった。なお、当研究センターのパプア・ニューギニア調査隊派遣の計画は総勢46名（うち11名はかごしま丸乗組員、9名は本学大学院生及び卒業生）で昭和58年10月27日鹿児島港出発、成功裡に同年12月8日同港帰着をもって実現できた。その調査隊員のうちの何人かは、このシンポジウムの参加者であり、ここで得た知識が役立ったことと信じている。小生もその一人である。

この冊子は当日の録音テープを基礎としてまとめたものであるため、後日発表者及び発言者が文章を提出してまとめたものと比べ、シンポジウムのありさまが生き生きと文面に表われていると思われる。まるで、参加者の息づかいまでが伝わるように感じられ、臨場感にあふれている。参加者が望外に多かったとは言いがたいものの、参加者のこのシンポジウムに寄せた関心と積極性は、企画責任者でもあった小生を充実感にひたらせるに十分だった。

末筆ながら、お忙しいにもかかわらず来学いただき、しかも、この冊子をまとめるに際しては並々ならぬ熱意で完全な形で手を加えてくださった小石、大塚両先生並びに意欲的に質の高い討論へと導いた寺師先生及び参加者各位に深い敬意と感謝の意をここに表わすしだいである。

昭和59年元旦

編者しるす